

中山恵子作 「ケニアより愛を込めて」

中山恵子ナレーション 兄の保がキリストを受け入れたというニュースほど、この夏、わたしを驚かせたことはありませんでした。なぜなら、彼はほんの数か月前まで、ある新興宗教の熱心な信者として飛び回っていたからです。わたしは11人兄弟の10番目で、一番上の兄夫婦とわたしだけがクリスチャンでした。

効果音 (ドアのノック音)

中山保 メグ、入ってもいいかい？

恵子 いいわよ。でも明日までのレポートがあるから、ちょっとだけね。

効果音 (ドアの開閉音)

恵子 それで、なあに、話って？

保 今度の水曜日の夕方から、集会があるんだけど、一緒に行こうよ。

恵子 ダメよ。行けないわ。だって、お兄さんだって知ってるでしょう。わたし、イエス・キリストを信じてるのよ。

保 考え直すなら今のうちだぜ。頭冷やしておれの言うとおりにしろよ。

恵子 何を言うの？ 兄さんは聖書も読んだことがないのに、イエス様がどんなお方か分からないでしょ！

保 とにかく集会には出ろよ。兄貴だけかと思ったら、妹までクリスチャンになっていたなんて、友達にだって言えやしない。

恵子 兄さん、はっきり言いますけど、わたしはクリスチャンです。イエス・キリスト以外は拝みません。

保 何?!

効果音 (平手打ち)

恵子 痛い！

保 よく考えろ！ いいか、水曜日は空けておくんだぞ。

ナレーション 彼は、とうとう家の中で活動を始めました。どの兄たちに対しても、万事この調子だったので、家の中ではケンカが絶えませんでした。特にわたしはクリスチャンだったので、余計に責められてしまいました。そこでわたしたちは、仕事でアフリカのケニアにいる一番上の兄の妻で、留守を守っている真知子お義姉さんに家に来てもらうことにしました。

慶彦(すぐ上の兄) 姉さん、ごめんね。こんなつまらないことで呼び出しちゃって。

真知子 別にいいのよ。ところで、どうなの、保ちゃんの様子は？

誠(7男) もうメチャクチャだよ。狂信的もいいところで、相手の話なんかちっとも聞かないで、自分の言いたいことを押しつけるだけさ。

恵子 お姉さん、わたし、もう耐えられない。あんな人、これからは兄弟とも思わないわ。

真知子 あらあら、そんなことは言わないの。自分の兄弟を愛せないのなら、自分も愛してもらえせんよ。それじゃ、保君と会ってこようかな。彼は部屋にいる？

慶彦 ああ。何か一生懸命拝んでいるよ。

ナレーション しばらくして、わたしたちは兄と真知子さんの言い争っている声を聞きましたが、すぐに彼らのところへは行きませんでした。すると突然、「ドシン」という大きな音が聞こえました。わた

私たちは慌てて廊下に飛び出しました。その時、兄の部屋では大変なことが起こっていたのです。

効果音

(廊下を走る足音)

恵子

お姉さん、お義姉さん、しっかりして！ ねえ、お姉さん！

光一郎(6男)

保！ 一体どうしたんだ？ 何をしたんだよ。

誠

バカ、そんなことを言ってるより、救急車を呼べよ。

ナレーション

真知子姉さんは、兄に話している時、カッとなった彼に殴られ、頭を柱にぶつけて倒れてしまったのです。彼女はすぐに救急車で病院に運ばれました。

効果音

(救急車のサイレン)

恵子

兄さん、なんてことしたの？ 暴力を振るってケガをさせるなんて、そんなの宗教じゃないわ。

光一郎

バカ。お前は本当にバカだよ。

慶彦

お前なんか、もう出てけよ。自分で何をしたか知ってるのかよ。

保

…。(こみ上げて泣く)

光一郎

もしかして、姉さんに何かあったら、ただじゃおかないぞ。

恵子

兄さんなんか、兄さんなんか、いなくなっちゃえばいいんだ。

ナレーション

真知子姉さんは、頭をひどく打ち、東京の大学病院に移されました。遠くケニアにいる兄は、すぐに帰国はできず、わたしたちはイライラしていました。しかし、とうとうある日、主治医の先生に――。

医師

すみません、少しお話ししたいことがあるのですが…。

優子

はい。…なんでしょう？ まさか姉の具合がひどく悪いのでは？

医師

いえ。ただ、この3、4日が峠です。できるなら、ご主人に帰国してもらったほうがいいでしょう。

優子

分かりました。先生、姉のこと、よろしく願います。

ナレーション

わたしたちは、すぐに兄のいるケニアに国際電話をしました。電話から聞こえる兄の声は、疲れきっているかのようにでしたが、彼はきっぱりとこう言ったのでした。

隆(長兄)

(フィルター音)すぐに帰る。真知子は大丈夫だ。神様が共におられるのだから。

ナレーション

兄は、信じられないほどの早さで、3日後に帰ってきました。

恵子

お姉さん、お兄さんが来ると顔色が違うわね。

真知子

やーね。大人をからかうじゃありません。それにわたしはこれでも病人なんだから。

誠

先生も「全く奇跡みたいだ」って言ってたけど、姉さんの精神力には頭が下がるよ。

真知子

保ちゃんの様子はどう？

慶彦

さあね。あんなやつのことなんか知らないよ。

誠

元気ないよ、やっぱり。ご飯もろくに食べられないからやせちゃって…。反省してるよ、あいつ。

真知子

わたしもあの時のこと、悪かったと思ってるの。悪いけど、今度病室まで連れてきてくれる？ 話したいの。

誠

来てくれればいいけど。話してみるよ。

慶彦

それじゃ学校だから、また来るよ。バーイ。

ナレーション

兄は、1週間もしないうち、ケニアに帰らなければなりませんでしたが、姉のいる病院より、

できるだけ家で、わたしたちと共に過ごしてくれました。

わたしは、それからしばらく兄弟たちの暮らす家を離れて、両親と住んでいたの、保兄のことはよく分かりませんでした。自分はクリスチャンだから、彼に対して愛を持つと努力していたのに、それは口先だけのことでした。わたしは、わずか1時間と離れていないところで暮らしているのに、彼のところへは一度も行こうともしませんでした。口先では「愛し、赦している」と言っていたのに、心はかたくなに保兄を責めていたのです。

そこへ、信じられない電話がかかってきました。

効果音

(電話の呼び出し音)

恵子

もしもし、中山ですけど…。

隆

(フィルター音)もしもし、こちらはケニアの隆ですが。

恵子

あ、わたしよ。恵子です。どうしたの？

隆

(フィルター音)ビッグニュースを伝えるからよく聞きなさい。保がイエス・キリストを受け入れた。

恵子

え？

隆

(フィルター音)保が、キリストを受け入れたんだよ。

恵子

…ほんと？

隆

(フィルター音) 今日来た手紙で知ったんだ。それでお前、行ってよく話してあげてくれよ。お前が最も近くにいるクリスチャンなんだから。

ナレーション

わたしの心の中は、その時メチャクチャでした。加害者の兄を信仰に導いたのは、遠いケニアにいる一番上の兄、つまり被害者の夫だったのです。それなのに、わたしは、最も近くにいたわたしは、何もしませんでした。今もなお病院のベッドにいる痛々しい姉の姿を見るにつけ、わたしは何度も「彼を赦す」と自分に言い聞かせながら、どうしても赦すことができませんでした。いいえ、愛情のかけらさえ示すことができなかったのです。——この喜びに満ちたニュースは、この上もなくわたしを苦しめました。たぶん、わたしの何倍も何倍もの苦しみの果てに、心から罪を悔い改めたはずの彼。そして、愛する妻に深い傷を負わせた弟に、遠くケニアからキリストの愛を語り続け、今、その回心を我がことのように喜んでいる兄。それなのに、それなのにこのわたしは！

わたしは、もう一度主を仰いで新しくされなければなりません。キリストの十字架は、ほかならぬこのわたしのためであったことを知ったときに、とめどもない涙の中から、主の深い愛がわたしの心を静かに包んでいったのでした——。

聖書の言葉

「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださいましたからです。神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。」(ヨハネの手紙第一 4:19-20)

<完>